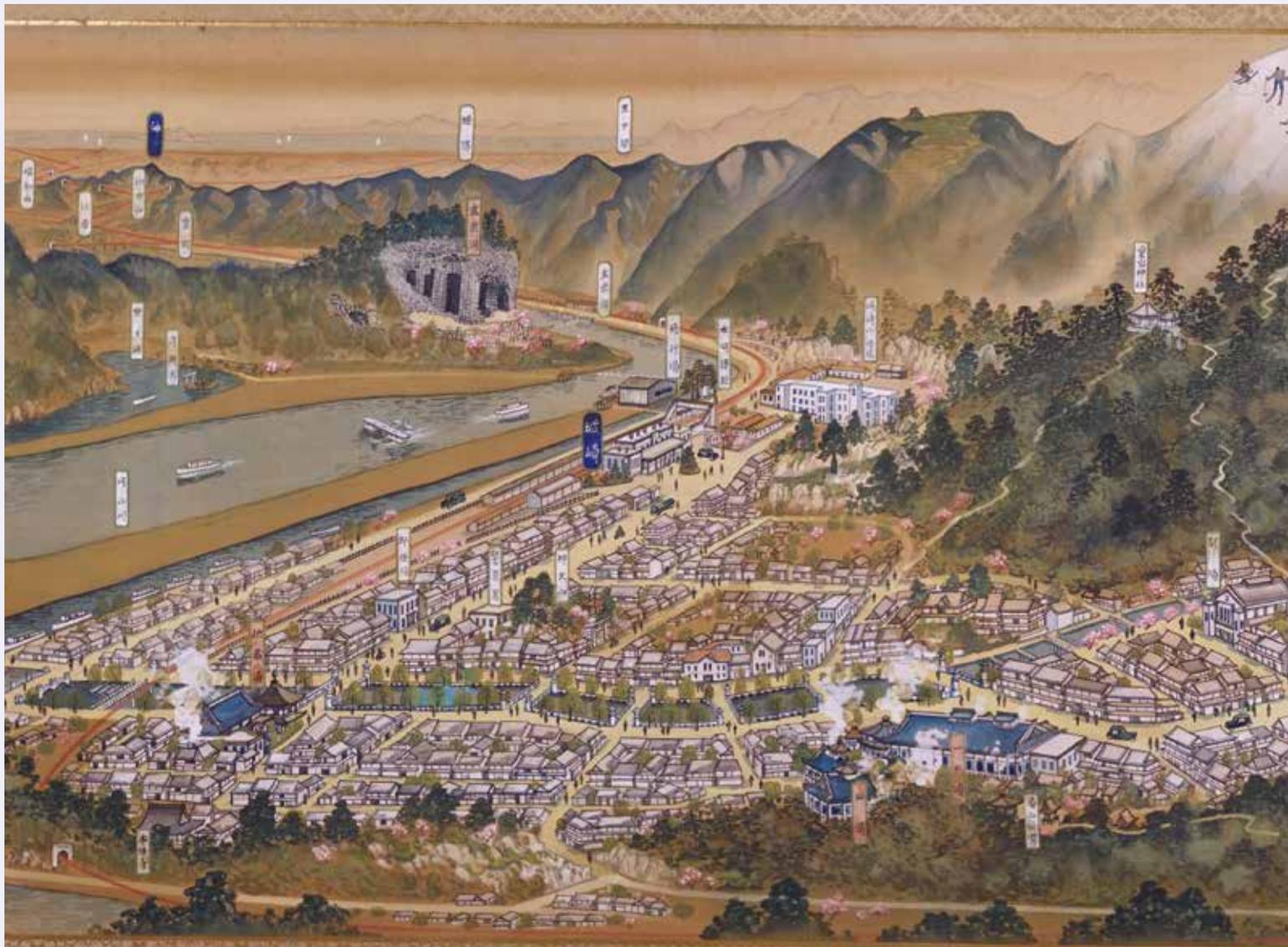


北但馬地震から98年——城崎温泉の復興その後

98 Years After the 1925 North Tajima Earthquake
— Beyond the Reconstruction of Kinosaki Onsen



志賀直哉の小説、「城の崎にて」で知られる城崎温泉は、
1925年に発生した北但馬地震とその後の火災により、類を見ない被害を被った。
発災から約100年、温泉街ならではの風情を残し復興した
町並み [fig.1](#) は、多くの建物に改修などの手がいった現在も、被災や復興の痕跡を伝えている。

松井敬代 | Takayo Matsui
豊岡まち塾副塾長・豊岡まちなみ連盟会長

聞き手

前田昌弘 | Masahiro Maeda
京都大学 / 会誌編集委員会委員

佃悠 | Haruka Tsukuda
東北大学 / 会誌編集委員会委員

佃悠、前田昌弘=文

温泉地らしさを残した復興まちづくり

— 城崎温泉が北但馬地震によりどのような被害を受けたのか、お聞かせください。

北但馬地震は、1925年5月23日、午前11時9分57秒に日本海に注ぐ円山川河口付近を震源とし発生しました。マグニチュードは6.8、震度は6強とされています。被害が特に大きかったのは、沿岸の震源に近い田結地区がある港村でしたが、内陸の城崎町や豊岡町も大きな被害を受けました^{fig.2}。地震発生時は、昼食準備の時間帯で、台所のある1階が潰れて出火し、風向きとの関係で温泉街は壊滅状態となりました。間口が狭く奥に長い2、3階建ての住宅が密集していて、死者272人のうち約9割が火災で逃げ遅れて亡くなった方だそうです。当時は湯治場だったので、多くの湯治客や宿の女性が炊事をしていました。宿泊者は40人、女性は194人が亡くなりました。

— 復興事業にはどのような方が関わったのでしょうか。

復興の立役者は当時町長だった西村佐兵衛であると言われています。地震発生時、山陰道町村会が行われていた関係で、西村は玄武洞近くの川で船に乗っていたようです。城崎町や豊岡町の方を見ると、町が黒煙に覆われていて、同乗していた豊岡町長と急ぎそれぞれの町に戻ったそうです。町長が被災地を見てまわった足取りはわかっていますが、真っ先に城崎温泉の泉源の被害の有無を見に行ったと言われています。城崎小学校の授業は発災から5日目という非常に早い段階で再開しましたが、その際、教育は大事だという話とともに、「この湯が湧き出る限り城崎は大丈夫だ」と鼓舞したと伝わっています。

国や県からの指導もあったと思いますが、城崎町は昔から民の力が強い土地柄で、老舗の宿屋が中心的な役割を担っていました。世帯主が出席する町民会議でまちづくりの方向性を決めていきました。

— 復興事業はどのように進められたのでしょうか。

重要な復興事業の一つとしてまず、町の中心を流れる大谿川の拡幅があります。狭く浅いため、震災以前から、大雨になるとすぐに増水して町が水浸しになっていました。復興事業では、川幅を2倍以上にし、川底を掘り、掘り出した土は川の両側の地盤の盛り土として使いました。さらに、玄武洞で崩落した玄武岩を土留めとして使用しています。あわせて弓形の橋も4本建設しています。一の湯前の王橋（1927年建造）、地藏湯前の地藏湯橋（1926年建造）は車も通れるようにしました。

旅館建築については、国や県は不燃化を進めるため



fig.1 『躍進の城崎温泉観光図(部分)』(提供:豊岡市)
昭和13年に作成された観光図。復興を遂げて新しい観光地として蘇った様子をアピールしている。駅など所々に設けられた鉄筋コンクリート造建造物も確認できる。



fig.2 北但大震災による城崎温泉の被害（提供：松井敬代）



fig.3 現在の城崎温泉の町並み。正面に見えるのが一の湯

に、鉄筋コンクリート造で建て直すよう指導したようですが、それでは城崎らしさが失われてしまうという声が町民会議で上がり、木造で復興させることになったそうです。

代わりに、駅、郵便局、警察署、役場、劇場や民間の建物何軒かは鉄筋コンクリート造とし、空地（公園や広く取られた外湯の前庭など）と組み合わせ、いく筋かの防火帯を形成することで、燃え広がりを防止する計画としました。また、火元付近の道路を広げたり、裏筋に道路を新設するといったことも行われています。既存の道路も狭かったため、道路に面する各敷地から1割を無償で供出させ、拡幅しました。これらも100回近く行われた町民会議で議論して決めたようです。

護岸側壁のパラベットや橋の和風のあかり、青銅製の金具など、デザインには工夫が凝らされています。これらの設計者は明らかになっていませんが、一の湯 fig.3、城崎小学校などの復興建築については、西村町長が早稲田大学に通っていた縁で、当時、早稲田大学の教授であった岡田信一郎や吉田享二（兵庫県新温泉町出身）が関わっていました。和風のデザインも、震災以前の形態をそのまま再現するのではなく、当時の先端のデザイン、技術を用いて設計された可能性が高いと思います。

— 計画通りに復興は進んだのでしょうか。

外湯である一の湯と曼陀羅湯は、公共的な建築物として真っ先に鉄筋コンクリート造で建設されましたが、水

が垂れる、音が響く、情緒がないと言った理由で住民から嘆願書が出され、その他4棟の外湯（地蔵湯、柳湯、御所の湯、鴻の湯）は木造で再建されました。町が復興を主導していたということもあり、計画の変更ができたのではないのでしょうか。その背景には温泉地の知名度を生かし、多額の義捐金が得られたということもあります。ただし、町主体で復興を進めた分、町の借金も多く、復興事業は1935年頃には完了したようですが、戦後の1950年まで借金が残っていたそうです。

歴史を重ねる町並みと震災伝承

— その後、町並みはどのように維持されてきたのでしょうか。

温泉街ということもあり、各旅館が都度手を加えていくので、町並みはかなり変化しています。元の地割は踏襲していますが、高度経済成長期に2階建てを3階建てに建て増したり、バスがすれ違えるように王橋を斜めに掛け替えたりしてきました。外湯の改修も大々的に行われていて、移転したものもあります。ただ、元々の町を中心である一の湯付近より奥には大きな旅館があり、それらは大きくは変わっていません。町外からの資本もほとんど入ってきておらず、中心地では古くからの旅館が今も営まれています。平穏な時代だけではなく、景気による観光業の浮き沈みもありました。1929年頃の内湯訴訟事件では、旅館に内湯をつくることをめぐって、町をあげての大紛争になりました。しかし、城崎温泉は「駅が玄関で旅館は客室、柳並木が廊下、外湯は大浴場、そしてお土産物屋が売店で飲食店はお食事処」といつの頃から言われており、外湯の文化が長く守られてきています。内湯も無いわけではないですが、規模が決められています。単なる観光地というだけでなく、湯治場として効用が知れ渡っていたことも城崎の町が廃れなかった要因かもしれません。最近では、コンスタントに観光客が来てくれています。

— 震災伝承の取り組みについてお聞かせください。

毎年、5月23日には消防訓練が行われ、地震発生時にサイレンが鳴って、黙祷をしています。震災翌年には温泉寺境内に寄附によって慰霊碑が建立され、大法要が行われました。その後も毎年、町内の宗派を超えて僧侶が集まり供養しています。消防団や町の関係者も集まります。同じ日に小学校では避難訓練と講話が行われています。新型コロナウイルスの影響で、この2年は規模を縮小しましたが、ずっと継続しています。

近年の取り組みでは、豊岡市防災課の主催で5月23日の前後に写真展を行うようになりました fig.4。震災から

時間が経つにつれて、行事も少なくなっていくことが常だ
と思いますので、100年近くたっても新しい取り組みがあ
るというのは珍しいことだと思います。

— 松井さんご自身の城崎温泉との関わりについてお聞かせ
ください。

現在、豊岡市市街地を中心に活動する豊岡まち塾の
副塾長、豊岡と城崎が加盟している豊岡まちなみ連盟の
会長、全国町並み保存連盟の理事をしています。元々、
城崎出身で、一時期離れていたこともあります。現在
も城崎に住んでいます。本家が旅館業を営んでおり、実
家も旅館の別館を任されていたこともありましたが、その
後、料理屋を開業しました。今は喫茶店に変わり、その
お店を兼ねた住居に住んでいます。

地元に戻った後は、旧豊岡市教育委員会で発掘調査
補助員として働いていましたが、竹野町教育委員会を經
て、2003年の合併後に豊岡市教育委員会で文化財を
担当することになりました。豊岡1925（旧兵庫縣農工
銀行豊岡支店）の国文化財登録が最初の仕事でした。
退職する前年の2015年に全国町並みゼミが豊岡で開
催され、豊岡の町並みを見直すきっかけを得て、豊岡ま
ち塾という団体を作り、現在も活動しています。豊岡の
古い建築の利活用に関わっている若い世代も活動に参加
してくれています。城崎には城崎温泉町並みの会が30
年前からありますが、現在は高齢の方が多いこともあり、
豊岡まち塾が全面協力してイベントを行ったこともありま
す。城崎と豊岡は距離が近く、また私自身が町の人をほ
とんど知っているというのも連携がしやすい要因です。私
自身、これまで城崎では、町並みや建物を個人的に案内
したり [fig.5](#)、建造物の登録に関わったりしてきましたが、
今は観光協会の案内人にも登録しています [fig.6](#)。

語り継ぐということ

— まもなく、発災から100年を迎えます。今後の語り継ぎ
についてお考えをお聞かせください。

これまで100年近く語り継ぎが行われてきたのは、城崎
では、2世3世が跡を継いできたことが大きな要因だと思
います。途切れることのない語り継ぎには人が居続けるこ
とが大切です。私自身も自分が語り継いでもらったことや
これまでの活動で明らかにしてきたことを次の世代に伝え
ることを意識しています。そのために、現在、本の執筆を
計画しています。特に高校生など若い世代に伝えたいと
思っていますが、城崎には高校がないので課題です。

100年前の人たちが残してくれた町並みが残ったこと
でその後の城崎の繁栄があります。次の100年も城崎が

繁栄し続けようとするなら、浴衣や下駄で外湯を巡るとい
うだけではなく、どうしてこの町が始まったのかという歴
史も残していかなければいけないと思っています。

2022年9月28日城崎温泉、10月6日オンラインにて



fig.4 「北但大震災メモリアル写真展」の様子（提供：豊岡市）
2016年に始まった、市防災課主催の写真展（市立図書館2階で開催）。
新しい伝承の取り組みも生まれている。



fig.5 町歩きの様子
兵庫県立大学の授業（阪本真由美教授）の一環として、学生と一緒に町
歩きをしている。西村佐兵衛の銅像の脇で説明する松井氏。

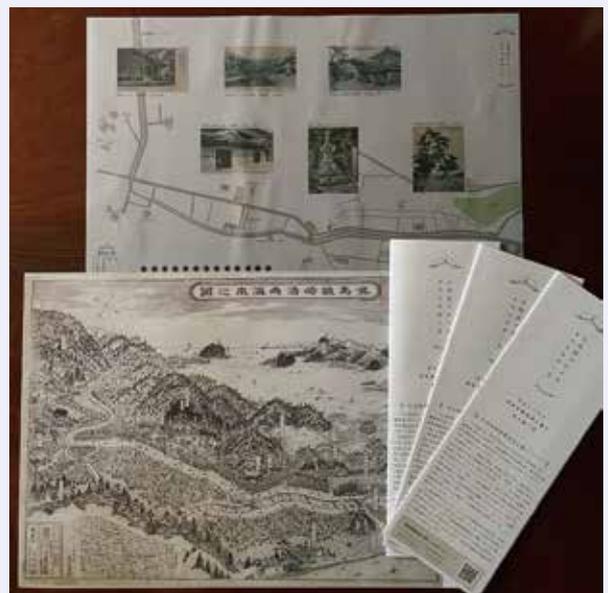


fig.6 『古地図でめぐるきのさきゆしま』（提供：松井敬代）
古地図に現在のマップを重ねたものにQRコードをつけて、一人でも町歩き
できるようにした。城崎温泉観光協会等で提供している。